

# 原田遺跡

長野県上伊那郡中川村大字片桐・原田

緊急発掘調査報告書

1982

南信土地改良事務所  
中川村教育委員会

## 序

この報告書は、片桐北部地区の県営は場整備事業により、緊急発掘した原田遺跡についての報告書です。原田遺跡は、国鉄飯田線七久保駅東方約2.6Kmの横前部落にあります。

今回の調査は、前年6月同事業により発掘調査した原田遺跡の南約100mを隔てた場所を中心に行なったものです。前回の調査の結果、縄文草創期及び縄文早期特に弥生中期初頭の遺構が発見されたことをふまえ、周辺の範囲の状況を確認することを目的として調査したところ、住居址以外のロームマウンド、土壤などで、集落周辺の施設であったことが明らかになり、出土品は少なく特殊なものは発見されなかったが、集落の範囲を知る上では大きな成果があったと言えます。

発掘作業は、7月14日から月末までの限られた期間で、天候が悪く水中ポンプまで使って作業するなど極めて悪条件の中で行なわれたが計画通り完了しました。

この発掘調査にあたり、県教育委員会文化課並びに南信土地改良事務所のご指導をいただき、調査団長友野良一先生をはじめ、権威ある諸先生を調査員に迎え、地元の方々のご協力により無事調査を終了することができました。ここに関係者に対し心から感謝申し上げます。

昭和58年3月

教育長 北沢正美

## 目 次

### 序

### 例言

第Ⅰ章 発掘調査の経緯	1
第1節 発掘調査に至るまでの経過	1
第2節 調査会の組織	1
第3節 発掘調査の経過	2
第Ⅱ章 遺跡の環境	3
第1節 遺跡の位置	3
第2節 地形及び地質	4
第3節 歴史的環境	5
第Ⅲ章 遺構と遺物	8
第1節 調査の概要	8
第2節 遺構と遺物	8
所 見	14

(挿図目次)

第1図 原田遺跡の位置図	3
第2図 原田遺跡の層序	4
第3図 原田遺跡附近遺跡分布図	5
第4図 原田遺跡附近の地形（発掘区域）	6
第5図 原田遺跡の遺跡配置図	7
第6図 第1号マウンド	8
第7図 第2号マウンド	9
第8図 原田遺跡出土土器	10
第9図 原田遺跡出土石器	11
第10図 原田遺跡遠望	12
第11図 原田遺跡、地層、遺物出土状態	13

## 例　　言

1. 本書は昭和57年度に実施した、片桐北部地区県営は場整備事業に伴う原田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 事業は南信土地改良事務所の委託により中川村教育委員会が実施した。
3. 本報告書は契約期間内（昭和57年度）にまとめることが要求されているため、調査によって検出された遺跡及び遺物をより多く図示することに重点を置き文章記述はできるだけ簡略化した。
4. 本文執筆は、友野良一、松下千里がおこない、遺構関係の図面は、松下千里が製図した。なお縮尺は各図に示してある。
5. 土器の実測、拓影及び石器の実測は高山よし子、細田登志美がおこなった。
6. 土器、石器の分類は友野良一がおこなった。
7. 写真撮影は木下平八郎がおこなった。
8. 本報告書の編集は教育委員会がおこなった。
9. 遺物及び実測図類は、中川村歴史民俗資料館に保管してある。

## 第Ⅰ章 発掘調査の経緯

### 第1節 発掘調査に至るまでの経過

昭和57年度に実施した片桐北部地区県営は場整備事業地区内の遺跡は、竹ノ上の上ノ原とこの原田の2ヶ所で、調査を委託される場合には、受託するよう県教育委員会より村の教育委員会に連絡があり、なお南信土地改良事務所より緊急発掘調査を委託したい旨の依頼があって、上ノ原遺跡と原田遺跡を同時に村教育委員会が編成した原田遺跡調査団が業務を遂行することになった。

昭和57年4月15日南信土地改良事務所長と中川村長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約」を締結し5月25日原田遺跡調査団会を開き発掘計画について協議し、上ノ原遺跡の発掘を7月13日に終えて翌14日より発掘調査を開始した。

### 第2節 調査会の組織

#### ・中川村教育委員会

教育委員長	松村 安雄
委員長代理	富永 精一
委 員	杉沢 要
"	齊藤 英雄
教 育 長	北沢 正美
教 育 次 長	湯沢 幸雄
技 師	北村 章
嘱 托	松下 千里

#### ・原田遺跡調査団

團 長	友野 良一 (日本考古学协会会员)
調査員	根津 清志 (長野県考古学会会员)
"	木下 平八郎 (" )
"	小木曾 清 (宮 田 村)
調査補助員	横田 愛子 (飯 島 町)
"	高山 よし子 (中 川 村)

### 第3節 発掘調査の経過

本年度は竹ノ上地蔵にある上ノ原遺跡と、この原田遺跡の2ヶ所の発掘調査が実施される関係で昭和57年5月25日に関係者が列席し鍛入式をおこない、上ノ原遺跡と平行して進められることになり、6月30日表土削りのためブルトーザーが入る、7月9日友野団長外2名で東西方向にA, B, C……南北方向に1, 2, 3……と5m毎のグリットを設定する。上ノ原遺跡が7月13日に完了したので、当日発掘器材を運搬する。そして調査作業上の休憩場及び器材の収納所は地元の松崎伝重氏のご好意により小屋をお借することができたので、これを整理、整頓して収納をなす。翌7月14日から本格的な発掘調査を進める。作業を始めた頃から天候が定まらないで途中で作業を打切ったり、又雨降りの次の日は発掘した場所へ水が一ぱいたまつたり、現場が非常に地下水がわき出るなどして悪戦苦闘の作業であった。この遺跡は住居址は確認されず又遺物も少なかった。地層調査で南北に3m、東西に2m、深さ5mの穴を重機で掘って7月24日に水中ポンプで湧き出る水をくみ出しながら地層図の作成をなす。その中で断面の落込みで土器が見うけられる。28日には遺跡の全測を、又グリットの断面の実測を行い后31日までに整理をして発掘作業を終了した。

悪条件の中で発掘調査をしたのであるが、調査団・南信土地改良事務所・地主の方・地元関係者発掘調査に参加して下さった方々のご協力とご配慮によって、無事調査を終了することができたことに、心から感謝の意を申し上げます。

#### ◦ 発掘調査参加者（順不同）

横田愛子、高山よし子、齊藤英雄、桃沢武、戸田新次、佐々木敦美、地田きく子、齊藤照子、荒井操、原みち子、木下文子、太田喜代子、桃沢みさゑ、北沢早苗、細田登志美。

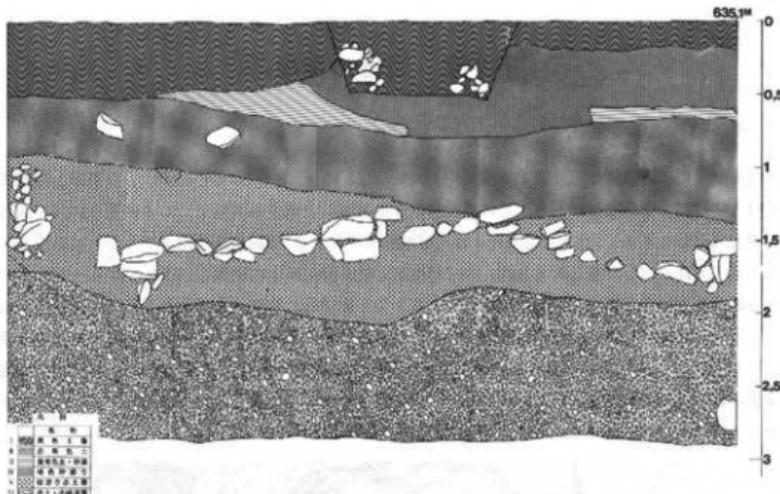
## 第Ⅱ章 遺跡の環境

### 第1節 遺跡の位置

原田遺跡の地理的位置は、東経 137 度 56 分 4 秒、北緯 35 度 38 分 55 秒に位置し、長野県上伊那郡中川村大字片桐の横前地籍にある。この遺跡は昨年度調査した場所の南側で、ここに至るには、国鉄飯田線七久保駅を下車し、東方に 2.6 Km 進んだ地点に所在する。原田遺跡は中央アルプスに源を発する与田切川の押し出した飯島町七久保、本村の横前と続く扇状地上に位置し、標高 630 m ~ 632 m に広がる集落跡である。同一扇状地面には縄文中期の梨ノ木遺跡、弥生前期の刈谷原遺跡が知られており、また前年発掘した縄文中期の溝林遺跡など一帯には多くの遺跡が分布しており埋蔵文化財の宝庫といった観がある。本遺跡は梨ノ木遺跡、刈谷原遺跡のある場所の近くで一段低い地点にあり、天竜川東側の良く発達した河岸段丘、遠く南アルプスの連山を望むことができ、背後には中央アルプスの山々がそり立つ姿を見ることができる景観の良い場所である。



第1図 原田遺跡位置図



第2図 原田遺跡の層序

## 第2節 地形及び地質

遺跡の位置する場所は天竜川の高位段丘にあり、一般に横前段丘の下段にあたる刈谷原・梨ノ木両遺跡の間を流れる小河川が作った原田扇状地に所在する。

### 地質

原田遺跡の基盤は、洪積層の上部に中期から新期ロームが堆積し、その上に原田遺跡の中央を流れ的小河川の運搬した砂礫が堆積した原田扇状地で、I～VI層が確認され、そのうち扇状地分の堆積はI～III層までである。遺構や遺物はII～III層中に分布している。

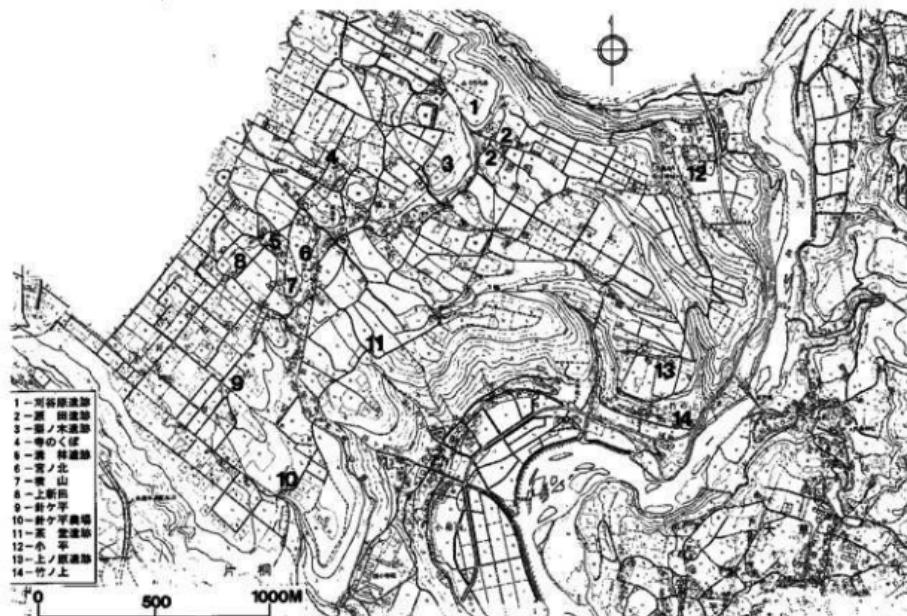
### 層序

- I層 黒色土層（耕土が主である）
- II層 赤色土層（赤色の層に黒土が混る）
- III層 黄褐色土（砂疊混り）
- IV層 褐色土層（砂混り）
- V層 砂混り赤色層（洪積層上部）
- VI層 赤色砂疊層（洪積層）

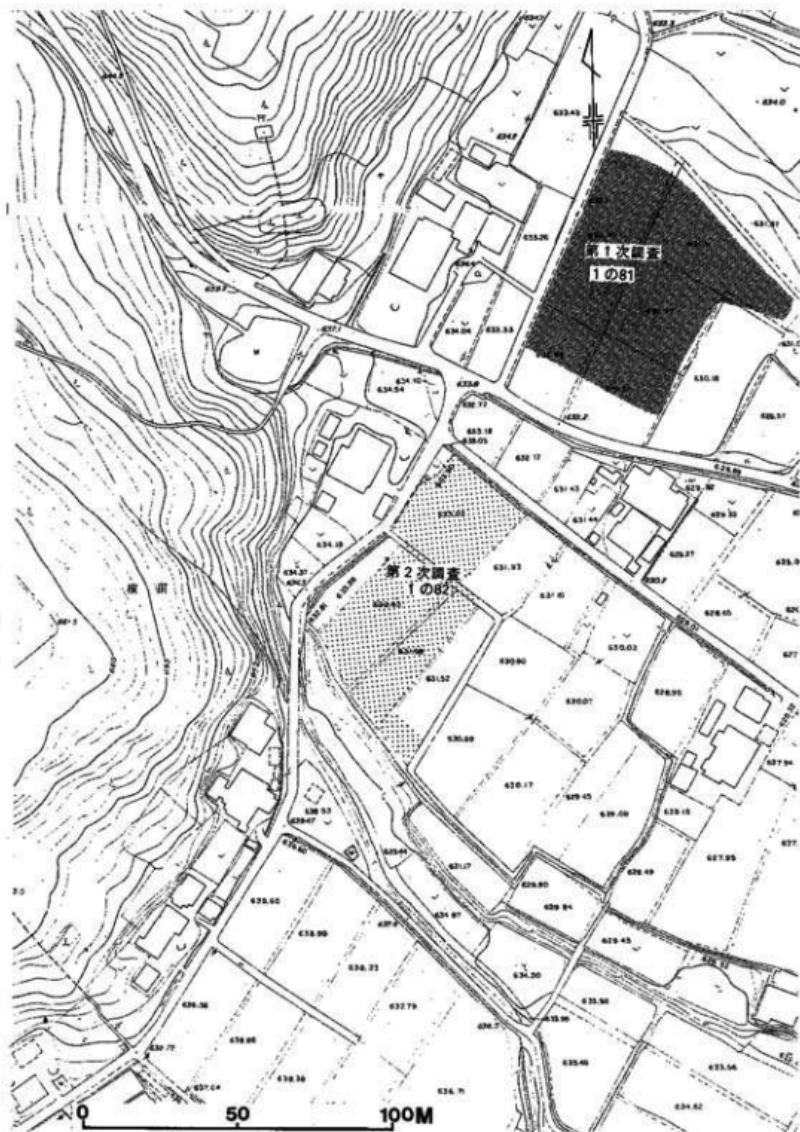
### 第3節 歴史的環境

原田遺跡の所在する中川村片桐地区は、古くから調査が行われており、現在までに19個所の遺跡を確認することができた。ここではそのうち本遺跡付近の遺跡について簡単にふれたい。

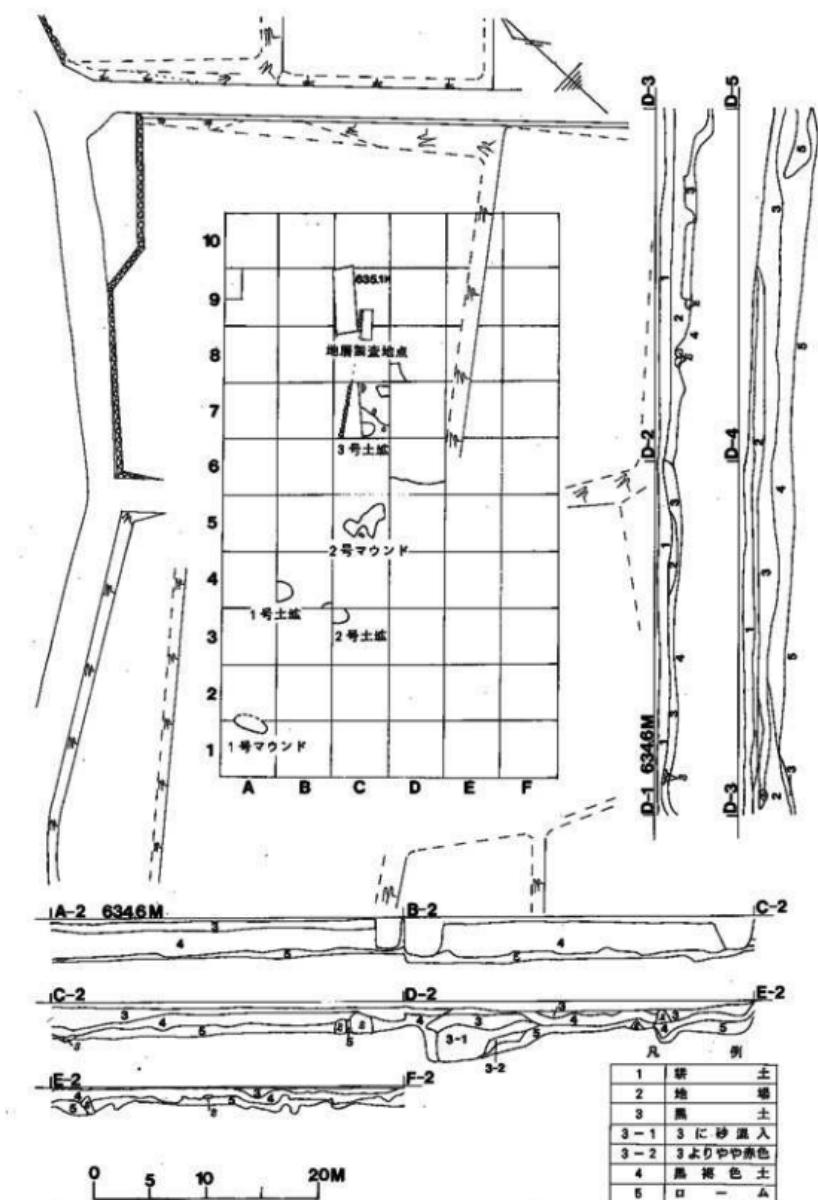
1. 梨ノ木遺跡。この遺跡は原田遺跡の西段丘上にあり、中川村の遺跡の中でも広い遺跡である。また、遺跡の北端にある堤からは土偶が出土したことでも有名である。また、縄文中期中葉から後葉にかけての遺跡として重要な遺跡の一つである。
2. 刈谷原遺跡。この遺跡は梨ノ木遺跡の北の段丘上にある遺跡で、発掘調査の結果弥生時代前期条痕文土器が主体で、そのほかに、縄文前期初頭清水上出土の薄手平痕文土器や縄文中期後葉の遺物を出土する遺跡として、長野県の重点遺跡の一つである。
3. 茶堂遺跡。本遺跡は天竜川の河岸段丘上に位置する縄文中期後葉の土器及、弥生前期の土器を出土していることで、中川村としては主要な遺跡の一つである。
4. 上の原遺跡。本遺跡は昭和57年度は場整備工事の事前に発掘調査した遺跡で、縄文中期後葉の住居址11軒、竪穴6基、土括18基、溝状造構1基が出土した縄文中期後葉主体とした遺跡である。



第3図 原田遺跡付近遺跡分布図



第4図 遺跡付近の地形(発掘区域) 1:2000



第5図 造構配置図

## 第Ⅲ章 遺構と遺物

### 第1節 調査の概要

原田遺跡の調査は昭和56年度に第1次調査が実施されたが、今回は第2次の調査ということになる事業で、南信土地改良事務所と文化庁との補助事業である。第1次の調査では予想だにしなかった弥生時代中期初頭の住居址と、多くの土器石器が発見され、この時期の研究に貴重な資料を提供してくれた。また、縄文草創期の表裏縄文土器、縄文早期の押型文土器、織維を含んだ早期末の土器、縄文後期、晚期の土器、それから弥生前期の水神平式土器等多くの遺物が出土したことにより、原田遺跡の重要性について多くの問題を提起してくれた。しかし、第1次調査の原田遺跡はごく限られた面積であることから、昭和57年度にも道路の南側もは場整備が行われることになっていることから、周辺の確認調査が必要になり、遺構配置図に示した箇所の調査を行うことになったのである。

調査は南側東西にA～F、南より北に向って1～10まで $5 \times 5 m$ 毎のグリッドを設定し調査が行われた。その結果ロームマウンド2基、土括3基を調査することができた。特に扇状地に当たるため地層の調査が必要となり、C-8～9グリッドに第2図にある如き結果を得た。このことにより、第II～III層中に遺構と遺物が含まれていることが確認された。扇状地の中央部には遺物は見受けられたが、遺構は検出することができなかった。このことは、扇状中央部が常時過剰堆積物のため、集落の設置が不向となつたためと考えられ、扇状地をはずれた左岸に集落が営まれ、今回調査された右岸地帶には住居以外の施設が存在したことを知ることができたことは、住居地を取りまく生活領域を考える上に貴重な資料を提供してくれた。

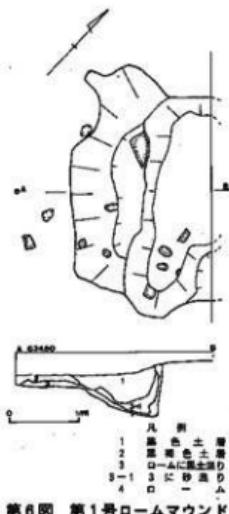
### 第2節 遺構と遺物

#### 第1号ロームマウンド（第6・8図）

本ロームマウンドは、A 1～2グリッドの中間に発見されたもので、その規模は長径 2.57 m、短径 1.01 m、高さ 0.73 m の橢円形で、頂部は耕土中にあったため削取られたように思われる。調査は発掘の都合で北側の個所は未調査のまま終ってしまった。南側の落込みには黒色土、黒褐色土が壁に沿ってクサビ状に入っていた。

#### 遺物（第8図）

遺構に伴う遺物は（第8図-4）の縄文中期後葉に比定されると思われる土器1片のみで、1号土括の時期を決定するまでにいたらなかった。



第6図 第1号ロームマウンド

### 第2号ロームマウンド（第7図）

本マウンドは、C. 5グリッドに発見されたもので、その形態は実測図であるごとく椭円形と円形の結合した形で、一定型的な形態ではない。調査の都合で北側の部分が未調査のまま終ったので大きさは推定の計測となってしまった。長径 3.6m, 短径 1.3m, 深さ 0.82m を測る。落込には黒土及び黒褐色土がクサビ状に入っていた。円形状のマウンドは長径 1.4m, 短径 1.1m, 深さ 0.3m とやや小規模である。

遺物は直接関係すると考えられるものは検出されなかった。従って、本マウンドの時期は不明である。

### 土壤（第5図）

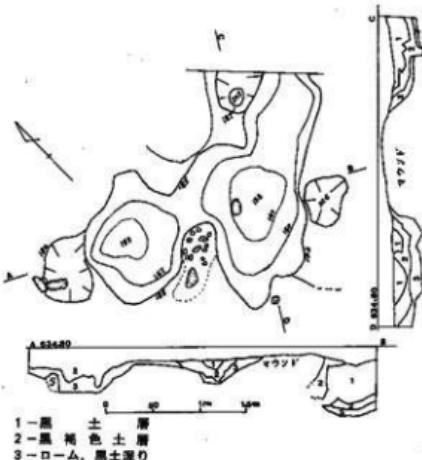
本遺跡発見の土壤は、1～3号まで調査し得たが、グリット掘のため計測はできなかった。遺物も出土しなかったので時期を判定するまでにいたらなかった。

### 土器（第8図）

本遺跡の出土遺物は量的には多いという方ではない。図1～2は表様の土器であるが、縄文早期の織維を含んだ鉢型式土器に比定されると思われるもの。3は無文薄手土器で縄文前期初頭に位置付けられる土器。4～6は縄文中期後葉の曾利系土器。7～12は縄文後期の土器。13～21は弥生中期初頭庄之烟式土器に比定される土器3点。縄文中期末の土器560点。縄文後期32点。弥生中期初頭型式7点。平安灰釉陶器2点。室町時代鉄釉陶器4点。灰釉陶器3点。天目茶碗破片1点。南北朝時代中國青磁2点。桃山時代、鉄釉陶器1点。江戸時代、鉄釉陶器11点。染付1点。白磁3点。その他鉄片3点が出土した。

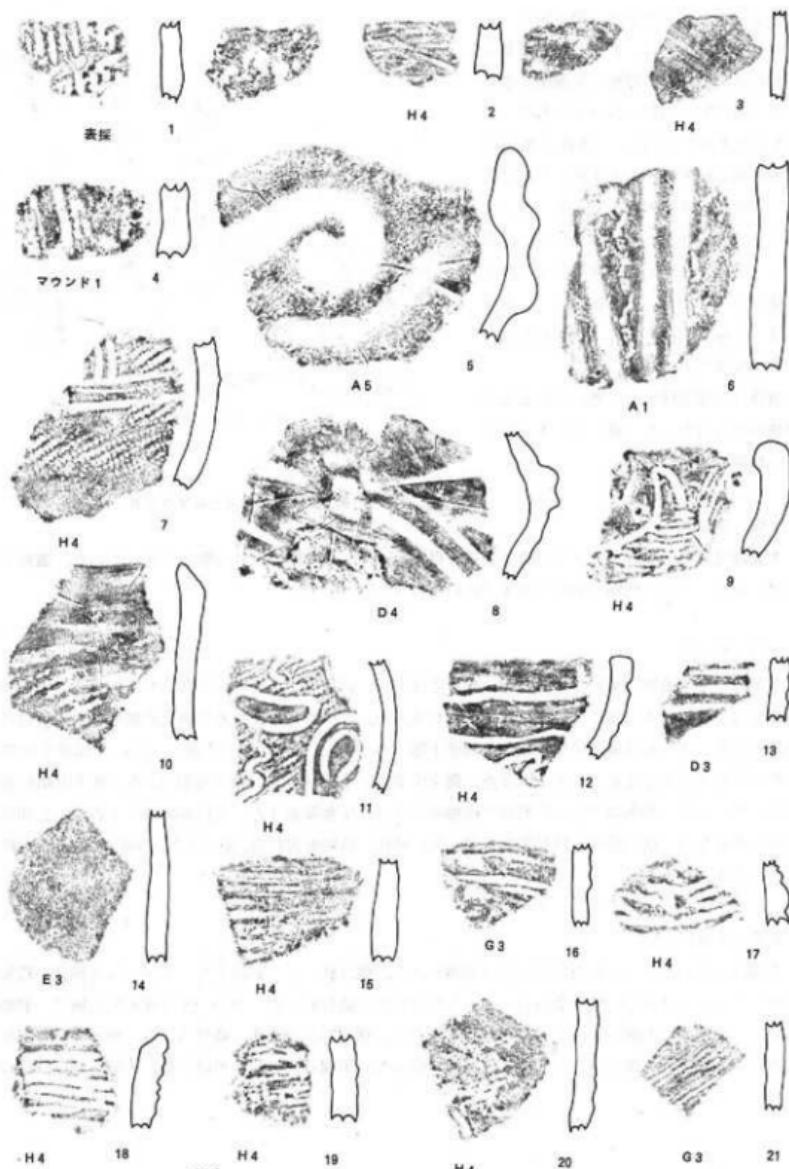
### 石器（第9図）

本遺跡出土の主だった石器については実測したが、他は数として記述した。1～4は硬砂岩の打製石斧、5～7は硬砂岩の横刃型石器。8・9は緑色岩の敲打器2点。10・11は硬砂岩石錐12、磨製石匙1、黒曜石の石鎌2点。そのほか打製石斧16点、横刃形石器10点、敲打器1点、磨石2点、円錐1点、剥片17点、石鎌4点、トリル3点、使用痕のある黒曜石10点、使用痕の無い黒曜石48点、合計145点が出土した。

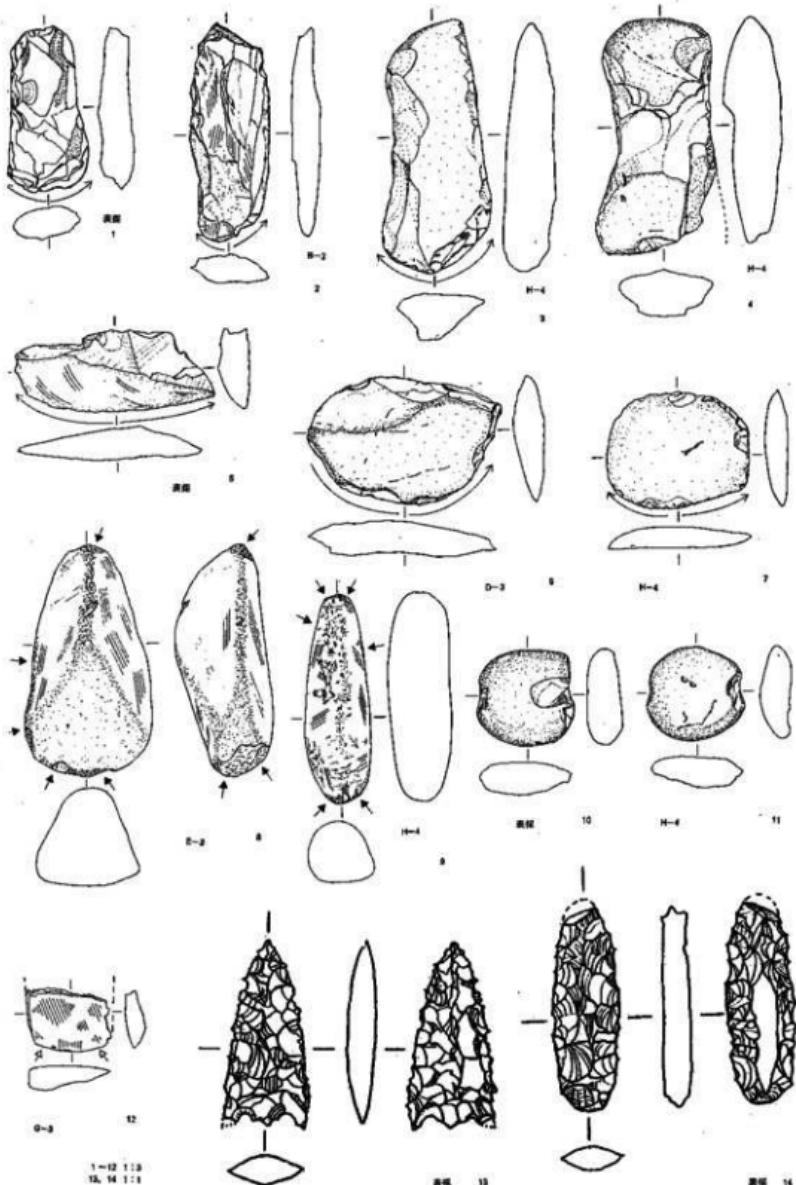


第7図 第2号ロームマウンド

- 1 - 黒 土 層
- 2 - 黒 褐 色 土 層
- 3 - ローム、黒土混り



第8図 原田遺跡出土土器

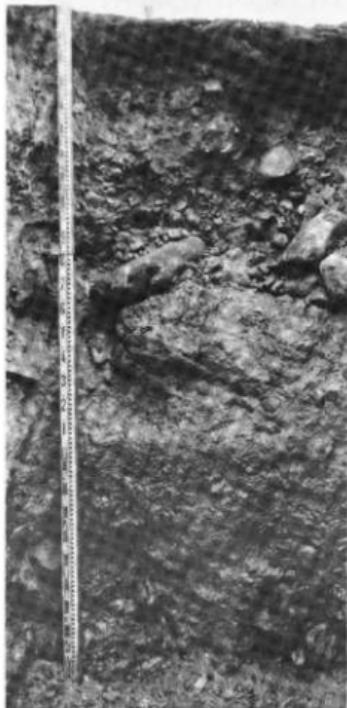
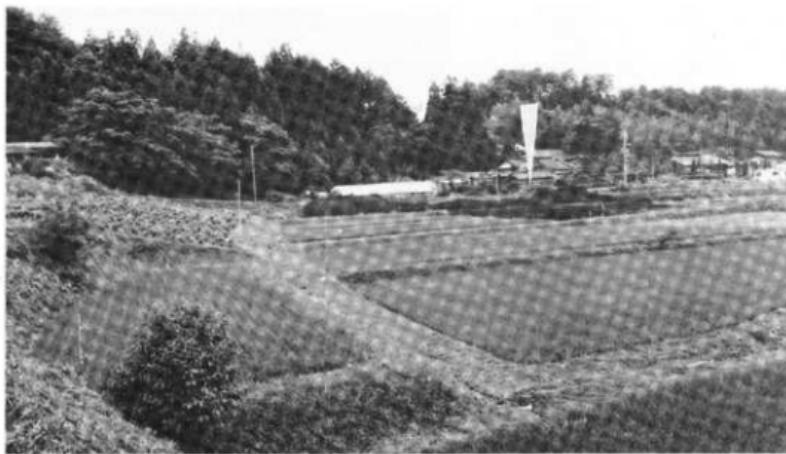


第9図 原田遺跡出土石器





第10図 原田遺跡遠望



上 原田遺跡  
左 地層調査  
下 遺物出土状態（縄文後期）



第11図 原田遺跡

## 所 見

今回の調査によって得られた成果は、予想以上のものであったと考えている。ここでは、紙面の都合もあって、そのなかの主要な点をあげ所見としたい。

1. 調査の内容については前章で詳しく述べてあるので省略する。今回の調査で特筆すべきことは、第1次調査（昭和56年度原田遺跡）では弥生中期初頭に当る住居址が7軒が出土したことにより、弥生時代中期の集落址であることが確認されたことである。今日まで、この期の住居については、これだけの規模をもった集落は中部高地には発見されていなかったことである。この点重要な遺跡と言わざるをえない。こうした成果を踏まえて調査を実施したところ、第1次調査での住居址の存在はいっさい認められず、土塹・ロームマウンドなど住居址以外の遺構にとどまった。こうした事実から、原田の集落のうちでは、集落以外の関連施設と考えられ、集落の形成範囲を知る上に重要な資料を提供してくれた。
2. これも前回の調査では実施できなかった原田扇状地の層序についての調査ができ、遺構や遺物の層位的な位置付が得られた点は評価すべき事柄の一つである。原田遺跡は、原田扇状地の中央部を中心として、南北に一段と低い所に分布するが、そのうち、北側の底地はさ程湿地ではないが、南側の段丘寄は相当の湿地である。この湿地帯が弥生時代の水田地域と言う考え方もあり、古い水田が発見されるのではないかと、大きな期待をかけて調査を行ったが、新しい水田の土手らしきものは検出されたが、古い水田の区画は発見できなかった。しかし、後世古い水田の整理が行われている可能性も考えられるので、後日の研究のため、耕土の深い湿地個所を選定し、花粉分析用のサンプルを採土したが、研究の都合で今回の報告書にはつい記載できなかったことは残念であった。後日改めて発表することを考えている。
3. 遺物について、今回発見された遺物は余り多い方ではなかったし、遺構に伴わないとより、土器の分類は、第1次調査と類似しているので、第1次調査の分類によった。I群は縄文草創期の表裏縄文で、近くは宮田村向山遺跡出土の土器と類似した土器である。第II群B、縄文早期押型文土器であるが、今回は検出されなかった。Cは条痕文を施した粕烟係土器。2類Aは縄文前期初頭の土器で、刈谷原遺跡で出土しているが未発表の土器群である。今回出土した土器は東海系で清水上遺跡（愛知県知多半島）出土の薄手指痕文土器、近くでは宮田村中越遺跡から多量に出土している土器。3類、縄文中期C類後葉に位置される曾利系～II～III式に比定されるもの。4類では縄文後期加曾利B式かと思われる土器。第5類A水係は見当たらなかった。Bは条痕文系の櫻王に比定される土器も検出されなかった。III群土器、弥生時代前期水神平式土器と確認される土器は検出されなかった。B類の庄之烟式土器が主体を占めている。縄文時代前期・中期頃の遺構が検出されないところから上方段丘上に分布する梨の木・刈谷原遺跡より流出したものと見る向もある。そのほか、平安時代・中世の陶器片が出土しているところより、中世の村の存在も考えられる。

石器は縄文・弥生が混在し分類は困難な面があり、後日の研究にゆずることにした。（友野）

**原田遺跡**　長野県上伊那郡中川村片桐原田

昭和58年3月

発行 中川村教育委員会

長野県上伊那郡中川村

印刷 藤原印刷株式会社

松本市新橋7-21